



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 2 月 21 日(金)

発行 館長 加藤 智一

山形職人町

斯波兼頼の子孫、最上義光の時代（慶長年間）に財政上余裕があったと考えられ、城下町の整備が行われました。その際、城下発展策として、地子銭¹（じしせん）を免除し、または生産に従事する各種の職人を保護するため免税として各地から職人を招いたようです。これら職人は、職業別に集落（というか町？）を構成していました。昭和 38～42 年、新しい住居表示法が実施されるまでは、昔ながらの町名を冠した職人町が身近に存在していました。その主なものをご紹介します。

【桶町】（おけまち）：山形市本町。グランドホテルから東に上ったあたり。東北電力の東側。桶細工家業とする人たちが住んでいました。桶屋町とも言いました。

【鍛冶町】（かじまち）：山形市宮町。現在の三小の東側界限。宮町五郵便局の南側周辺。鋏・鎌・鋸などの製造を家業とする人たちが住んでいました。

【銀町】（ぎんまち）：山形市本町。山形中央郵便局の東側界限。歯科医医師会館周辺。金銀細工を家業とする人たちが住んでいました。銀子町とも言いました。

【材木町】（ざいもくまち）：諏訪町の第一貨物のあたりかな？材木業者が住んでいた職人町で、木町（きまち）とも言われました。

【鞆町】（さやまち）十日町三丁目あたりかな？刀剣の鞆を作っていました。

【銅町】 鋳物師十七人を鍛冶町から隣の町に移し銅町と命名。火を扱う町だけを並べる町づくりをし、鋳物産地としての基礎がつけられました。日本における工業団地のはしりと言えるかも？当時の山形は修験道で知られた出羽三山神社の霊験への参詣人が一夏一万人にも及ぶ賑やかな門前町であり、みやげとして求める山形鋳物の仏具、日用品もおびただしい数にのびりました。

【塗師町】（ぬりしまち）：山形市十日町。山形中央郵便局の東側周辺。漆塗りを家業とする人たちが住んでいました。

【番匠町】（ばんしょうまち）七小の裏周辺。大工が住んでいました。

【檜物町】（ひものまち）：山形市本町の八文字屋の裏界限。指物や曲げ物細工を家業とする人たちが住んでいました。

【歩町】（ぶまち）：山形市錦町から宮町。現在の相

互タクシーがあるあたり。東は四日町、西は肴町、南は小橋町、北は宮町に接します。最上義光の城下町割りのとき徒士組を配置し、徒士町と称しましたが、のち城西にあった鍛冶町（かぢまち）を城北に移してから、間違えやすいので、歩町と改称したといわれています。幕末には下級武士たちの副業であった傘製造が、明治期以降発展しました。川越医院の南側周辺。徒歩衆とも言われていましたので、古くは徒歩町（かぢまち）と言われていました。北山形駅近くの踏切は「歩町踏切」だったと思います。

【弓町】（ゆみちょう）：山形市小荷駄町。市立図書館の北側周辺。弓の製造や弓衆が住んでいたところ。

【蠟燭町】（ろうそくまち）：山形市十日町。紅の蔵あたり。山形銀行十日町支店の東側。蠟燭製造を営む人たちが住んでいた。「あかしまち」とも言われました。

最上義光は、産業振興に力を注ぎ、これら職人町は、御免町（人足免除）として庇護したということです。しかし、最上家は、元和八年（1622 年）に最上家中の諸臣内紛を生じて争い、これが幕府の介入するところとなり 57 万石から 5 千石に減封され近江の国大森に左遷されてから後 250 年の間に、領主が 12 氏も変わりましたが、一部の城主²をのぞき、積極的に商工業を庇護する者はいませんでした。

《備考》

1) 地子銭（じしせん）

日本の古代・中世から近世にかけて、領主が田地・畠地・山林・塩田・屋敷地などへ賦課した地代を指す。賦課した地目に応じて田地子・畠地子・塩浜地子・林地子・屋地子などと呼ばれた。元々、地子は生産物地代の性格を持ち、その土地の生産物が地子として納入されていたが、中世後期ごろから貨幣経済が進展していくと、貨幣による地子の納入が増加していきました。

2) 秋元永朝（あきもと つねとも）出羽山形藩の第 2 代藩主。江戸時代中期～後期。銀町の工業が発達したのは、この時代で、当時江戸では元禄の頃よりからの金銀銅の携帯用品が珍重され、永朝自身も手づから製作していたといわれています。



達したのは、この時代で、当時江戸では元禄の頃よりからの金銀銅の携帯用品が珍重され、永朝自身も手づから製作していたといわれています。